

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Hunting Strategy and Food Regulation among the Djinang in Arnhem Land

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 利夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004340

アーネムランド・アボリジニ、ジナン族 の狩猟と食物規制

松 山 利 夫*

Hunting Strategy and Food Regulation among the Djinang in Arnhem Land

Toshio MATSUYAMA

The Djinang (Yandjinung) is one tribal group of the central Arnhem Land aborigines. In 1975, they developed Gamardi outstation within their traditional region (country). They exploit wild resources as foods in this Swamp-Eucalyptus forest ecosystem.

They mainly exploit waterfowl, wallaby, emu, water-buffalo and fishes, which form 50% of their food. The hunting strategies utilized to take these game have been changed by newly introduced equipment such as shotguns, rifles and 4 wheel-drive trucks. For example, when they hunt one species of waterfowl (*Anseranas semipalmata*) they use a system of triangulation based the sounds made by the bird to pinpoint hunting spots. This hunting strategy is based on the modern equipment. About three decades ago waterfowl were hunted in the evening, using spears and spear-throwers, from the trees beside the swamp.

Besides these changes in hunting strategies, the inhabitants of Gamardi outstation still follow the food taboos strictly. One of these is applied on the death of close kin, especially a father and a father's siblings. In this case a person cannot eat nor hunt/gather the main totemic (Dreaming) animals/plants of the dead person, since it is believed that the spirits of the dead person and their ancestors dwell in these totemic animals/plants. Two or three years after the funeral ceremony (*manekai*), a purification ceremony (*wandjil*) releases them from the taboo.

According to my survey, the inhabitants of Gamardi outsta-

* 国立民族学博物館第1研究部

tion retain these beliefs despite of the new hunting equipment and strategies. The outstation functions to maintain the traditional culture of Arnhem Land Aborigines.

I. はじめに	iii) ワラビー
II. ジナン族の領域と3つの生態系	iv) クビナガガメ
1. 領域	v) エミュと水牛
2. 3つの生態系と資源	vi) 魚介類とドロガニ
III. 湿地・森林複合生態系と狩猟	IV. 食物規制と解除法
1. ガマディ「むら」の領域と人口	1. 食物規制とその範囲
i) ガマディ「むら」と領域	i) トーテム（ドリーミング）
ii) 「むら」の人口	ii) 食物規制の範囲
2. 狩猟動物と狩猟頻度	2. 食物規制の解除法
i) 狩猟動物の季節性	V. まとめ
ii) カササギガン	

I. はじめに

オーストラリアの先住民アボリジニは、ほとんどが非アボリジニ系の都市に居住し、保留地やアボリジナル領の居住者は、わずかに25%にすぎない。しかも、これら非都市居住者の8割は、ミッションないしタウンシップとよばれる「まち」Aboriginal Town に集住する。いわゆるアウトステーション（後述）で相対的に伝統的な生活を営む人口は、非都市居住者の2割、約7600人と推定されるにとどまっている [FISK 1985: 2, 8-9]。

アーネムランド・アボリジナル領の約1万人を数えるアボリジニも、大半が「まち」に居住する。たとえば、中部アーネムランドのマニングリダ Maningrida 管区の場合、「まち」の居住者は、管区人口1260の6割におよび（1982年10月現在）、雨季にはこの割合が7割強に上昇する [ALTMAN 1982: 38]。

このように、「まち」への集住がおこる一方で、「まち」をはなれ本来の部族領域にあらためてアウトステーションを建設する動きが、1970年ごろからあらわれた。その契機のひとつになったのが、「まち」における異部族の混住と、それにもとづく社会的緊張であった [MEEHAN and JONES 1980: 133-135]。そのうえ、「まち」では長老のもつ伝統的な権威が無視され、その結果として社会的混乱が生じたことも、アウトステーションの建設を促進させたのである。さらに、本来の領域へもどることに

よって、伝統的な土地権 Land right の正統な継承者であることを主張するためにも、「まち」をはなれることになった [ALTMAN 1980: 97]。こうしてつぎつぎと建設されていったアウトステーションは、「まち」のサポートのもとで運営されていくことになる。それをもっとも端的にあらわすのが、「まち」から定期的に補給されるマーケット・フーズである。小麦粉や砂糖、紅茶、缶詰などが、その主要な食品である。アウトステーションの居住者はこれらの食品に、食糧のかかなりの部分を依存する。

こうしたマーケット・フーズの供給は、かつて食糧の60%から季節によっては90%に達した植物質食糧 [PETERSON 1974: 22] の採集活動を著しく低下させていった [JONES 1980: 130-136; KIRK 1981: 86]。アウトステーションに住むアボリジニといえども、厳密には、狩猟・採集民とはいいい難い状況にある。

しかし、その一方で彼らはトラックで狩り場を移動し、散弾銃やライフルでさかんに狩猟をおこなうのである。その狩猟行動は、木製ヤリとヤリ投げ器など [ELKIN 1981: 39; BERNDT and BERNDT 1985: 115-118] を使用したかつての状態にくらべておおきく変容し、狩猟の効率も著しく向上してきている。現在、アウトステーションの主食糧に占める捕獲動物(野生食糧)の割合は、エネルギーに換算して5割程度とみられる [MEEHAN 1977: 497-517, 1982: 151-156; ALTMAN 1982: 39]。

ここでは、そうした状況にあるアーネムランド・アボリジニの狩猟行動と、食物規制がもたらす捕獲動物の制限について報告する。それは、採集の脱落や狩猟具の変化、さらには都市居住者の増加にみられるように、伝統文化の変容をよぎなくされている現代の狩猟民文化を考察する、ひとつの試みでもある。

この目的を明らかにするために、この報告では、中部アーネムランド・マニングリダ管区に1975年に建設されたジナン Djinang 族 [TINDALE 1974: 224] (またはヤンジナン Yandjinung 族 [WARNER 1964: 36]) のアウトステーション、ガマディ Gamardi を事例にとりあげる。ここで検討する資料は、1982年の9月の予備調査のあと、1984年8月から10月にかけてと、1986年10月から87年1月にかけておこなった現地調査によって得られたものである。

なお、ここでいうジナン族は、ジナン語(ヤンジナン語)を母語とする集団と便宜的に考えておき [WARNER 1964: 50-51], tribal group の定義をめぐる議論 [BERNDT 1959: 81-107; TINDALE 1974; ELKIN 1981] の検討は、とりあえずさしひかえたい。

ところで、筆者のアーネムランド・アボリジニ調査はのべ3回を数えるが、いまだ彼らの文化の全貌を明らかにできるまでにはいたっていない。それは、彼らがもっと

も重要だとするいくつかの生活習慣——とりわけ、祖先の精霊のまつりをとおして、彼らの価値体系が集約的に表現されると推測されるグナビビ gunabibi 儀礼 [マドック 1986: 205-240; WARNER 1964: 280-301] など——の観察が許されていないからである。したがってこの報告では、現代アボリジニの狩猟と食物規制、およびその規制がもたらす狩猟動物の制限に限って、現状を記述するにとどめたい。この立場からでも、最近の20年たらずの間におおきく変容したアーネムランド・アボリジニの狩猟に関して、少なくともあらたな資料が提出できると考える。

Ⅱ. ジナン族の領域と3つの生態系

1. 領 域

人口が約200人と推定されるジナン族 [MILLIKEN 1976: 242; WYCLIFFE BIBLE TRANSLATORS 1986: 72] は、ブライス川の右岸、ほぼ東経134度34分から、アラフラ湿地の東縁、東経約135度5分にかけてと、南緯12度以南の島嶼から南緯12度40分あたりの内陸にかけての 1800 km² を、領域にもつ [TINDALE 1974: 224]。

地形は比高が少なく、概して平坦であるが、海岸から10数 km 内陸に地形の変換線が認められる。この変換線の北部には海拔 20 m 以下の低地が展開するのに対し、南部には次第に高さをます砂岩を主とする平原がひろがる。この平原の東部は比高 20-60 m の急崖をなし、アラフラ湿地におちこむ (図1)。

ジナン族の領域には南部と北部で地形に若干の差がみられるものの、気象はきわめて一様で、月平均最高気温は摂氏30~33度、同じく最低気温は17~25度の範囲におさまる。また年間 1300 mm に達する降水量のほとんどは、12月から5月にかけての雨季に集中する (マニングリダでの観測値 [MEEHAN 1982: 22-25])。そのため、雨季には地形変換線以北の低地がほとんど湛水し、1970年代中ごろからの自動車に依存した移動を困難にしている。

こうした領域をもつジナン族は、4つのいわゆるローカル・グループ (父系のトテム氏族で、特定の領域をもち、外婚単位をなす [WARNER 1964: 16-29; ELKIN 1981: 76-80, 112-113]) にわかれて居住する。

そのひとつ、モロゴン Murrugun (または Murugun ドゥア半族に属す) グループは北部の島嶼および海岸低地を領域にもつ。地形変換線を含む低地から平原にかけては、西部にウラッキ Wurrakki (または Wulagi イリチャ半族に属す) グループが、

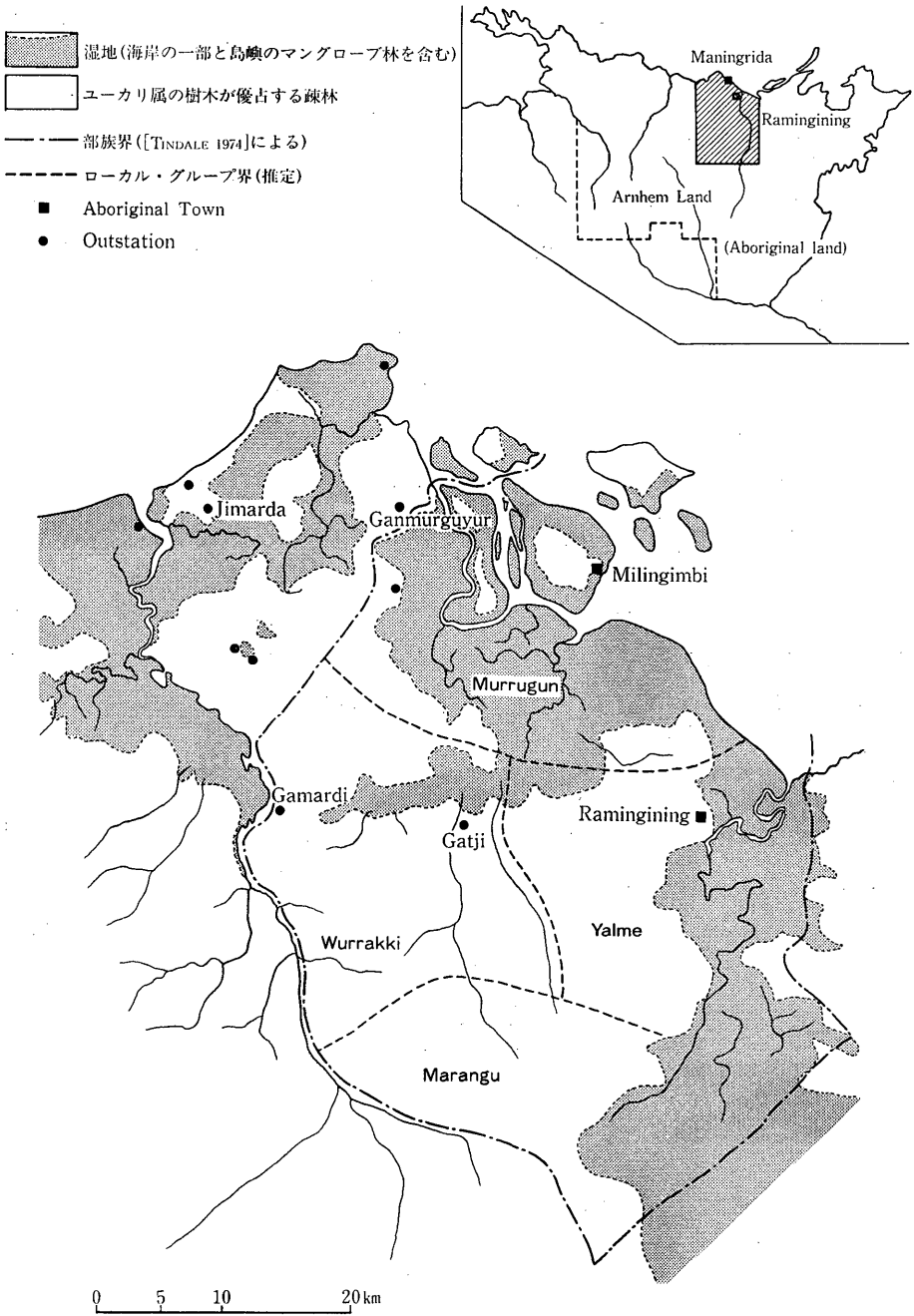


図1 ジナン族の領域

その東部からアラフラ湿地にかけてはヤルメ Yalme (イリチャ半族) グループがそれぞれ居住する。4つめのローカル・グループ、マラング Marangu (ドゥア半族) は、南部のユーカリ属の優占する林におおわれた平原が、本来の居住域である。

2. 3つの生態系と資源

ジナン族の4つのローカル・グループは、微妙に異なる生態系に生活する。北部のモロゴン・グループは、*Rhizophoraceae* に含まれる樹木からなるマングローブ林におおわれた海岸線と、海岸砂堆の背後に形成された低湿地を領域に含む。この湿地にはカヤツリグサ科のイヌクログワイ *Elcocharis dulcis* やスイレン *Nymphaea* spp. が分布し、多数の水禽類や爬虫類、それに18世紀にチモールから導入され、その後野生化した水牛 *Bubalus bubalis* が棲息する。また、汽水域にある河川やクリークには、ドロガニ *Scylla serrata* やバラマンディ *Scleropages* spp. などの魚介類、それにワニ *Crocodylus porosus* が棲息する。モロゴンは、海岸・汽水・湿地生態系に居住するのである。

一方、マラング・グループは南部の平原を領域にもつ。この平原はユーカリ *Eucalyptus* spp. が優占する疎林におおわれ、ところによってソテツ *Cycas angulata* やタコノキ *Pandanus* spp. が分布する。この疎林は、アボリジニが意図的におこなうブッシュファイアによって形成された。すなわち、亜熱帯モンスーンのつよい影響下にあるこの地域では、自然のまま放置すると降雨林におおいつくされ、カンガルーなど中・大型の動物の棲息が著しく困難になる。したがってアボリジニは、これらの食糧資源を確保するため [LATZ and GRIFFIN 1979: 78] と、狩猟の補助手段として、森に火を入れつけてきた。このブッシュファイアによる環境のコントロールの結果 [JONES 1969]、ユーカリ属が優占する現在の疎林が形成されたのである。

このアボリジニの火入れによる植生の変化とその効用については、Hallam の詳細な報告がある [HALLAM 1979]。それによると、火入れはカンガルーなどの狩りを容易にするばかりでなく、えさとなる植物を大量に供給するという。さらに、くりかえし火入れをおこなうことによって、降雨林が疎林に変化することが知られている。こうして火入れによって形成された疎林には、ワラビーとカンガルー *Macropus* spp. やエミュ *Dromaius novaehollandiae* をはじめ、大型のトカゲなどが分布する。マラング・グループの領域は、植生・動物相が相対的に単純な森林生態系をなす。

この両者の間にはさまれた、地形変換線を含む地域には、西部にウラッキ、東部にヤルメの2つのローカル・グループが生活する。両地域には、湿地や河川、クリーク

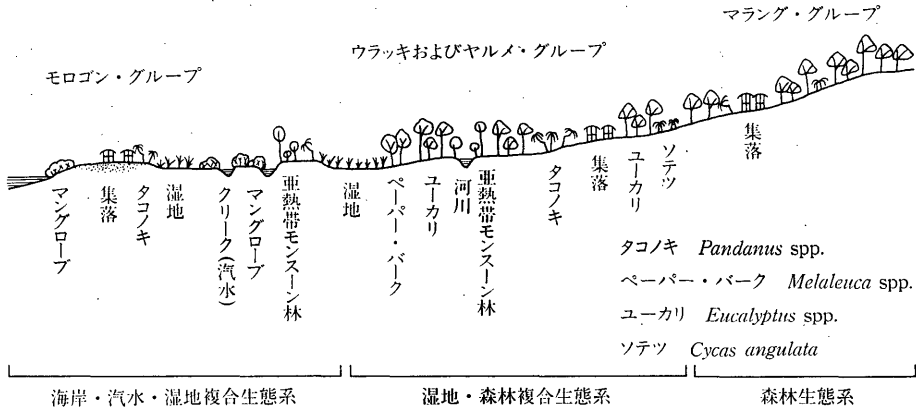


図2 ローカル・グループの居住域と生態系模式図

が疎林のなかにモザイク状にはめこまれている。その湿地にはカヤツリグサ科の草本が繁茂し、クビナガガメ *Chelodina rugosa* や水牛、カササギガン *Anseranas semi-palmata* をはじめとする各種の水禽類が分布する。また河川には各種の魚類やワニ *Crocodylus johnstoni* が棲息し、ユーカリ属が優占する疎林にはワラビーやエミュその他の陸棲動物が分布する。ウラッキとヤルメの2グループは、湿地・森林複合生態系に居住するのである(図2)。

4つのローカル・グループは、異なる生態系をたくみに組み合わせてすみわけている。そこには、主食糧をはじめとする生活資源の開発可能な量に、多少の差があるはずである。

ジナン族の領域に認められる2つの複合生態系と1つの単一生態系とは、中部アーネムランドに共通する。これら3つの生態系それぞれの開発可能な資源の定量的検討はおこなっていないが、これらは、中部アーネムランドの部族領域のおおきさにもとに反映されるのである。すなわち、海岸・汽水・湿地複合生態系を領域にもつナカラ Nakara 族とバララ Barara 族はともに 500 km² で、中部アーネムランドでは部族領域がもっとも小さい。これに対して、内陸の森林生態系では、レンバランガ Rembarunga 族が 13,000 km²、ガンウィング Gunwinggu 族が 7,300 km² と、相対的にきわめておおきい領域を有している。この2つの生態系にはさまれた湿地・森林複合生態系では、部族領域が 1,600–3,100 km² (ガンバラング Gambalang 族 1,600 km²、ジナン Djinang 族 1,800 km²、ジンバ Djinba 族 3,100 km²) のひろがりをもつのである [TINDALE 1974]。アボリジニの部族領域のおおきさは降雨量(環境の豊かさ)と関係にあることが知られているが [BIRDELL 1953: 171–

207], 降雨量に著しい地域差のない中部アーネムランドでは、部族領域の大小は、そのまま開発可能な資源の量的な差に基づくと考えられる。したがって、ジナン族の領域においては、北部の海岸・汽水・湿地複合生態系に資源が豊かであり、人口支持力が相対的に高いと判断できる。これにつぐのが湿地・森林複合生態系で、後述するガマディ・アウトステーション（以下ではガマディ「むら」と表記する）は、この複合生態系に位置する。

Ⅲ. 湿地・森林複合生態系と狩猟

1. ガマディ「むら」の領域と人口

i) ガマディ「むら」と領域

ガマディは、マニングリダの東 100 km に位置する。この地域一帯はローカル・グループのひとつウラッキの領域である。しかし、1975年に建設されたこのガマディ「むら」の主要なメンバーは、北部海岸地域に居住したローカル・グループ、モロゴンの人びとからなる。つまり、ガマディの成員の一部は、彼ら本来の居住地から、現在地へ移動してきたのである。

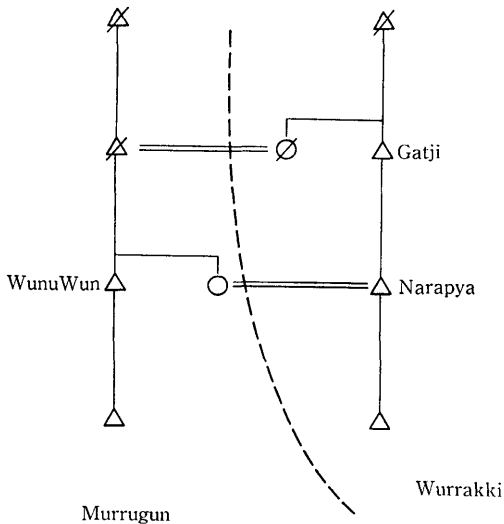


図3; ジャッキー・ウヌウンとマイケル・ナラビア

この移動が可能であったのは、換言すればモロゴン・グループの人びとがウラッキ・グループの領域に「むら」を建設し得たのには、つぎのような事情があった。すなわち、現在のガマディ「むら」のリーダーであるジャッキー・ウヌウン Jacky WunuWun¹⁾ の母（死亡）が、ウラッキ・グループの成員だったことである(図3)。

ジナン族においては、ローカル・グループがもつ領域は、通常、父系出自をたどって継承される

1) アーネムランド・アボリジニは、彼ら本来の名前のほかにも英語名をもっている。公式にはこの2つを合わせ、本来の名前を姓として綴る。アボリジニ自身は、相互に英語名でよびかけあい、本来の名（これを彼らは英語で「ブッシュ・ネーム」とよぶ）を用いることはない。英語名以前は、男女それぞれ4つずつのセクション名（IV章1-i）がよびかけに使われた。

(英語でいう場合、彼らはこれを「父のカントリー」とよぶ)。したがって、ガマディ「むら」が位置する地域は、ウラッキ・グループのガッチ Gatji からマイケル・ナラビア Micheal Narapya へと継承される。しかし、本来のモロゴン・グループの領域を兄にゆずったジャッキー・ウヌウンにとって、あらたな「むら」建設の可能性は、母のゆかりの土地（ウヌウンの「母のカントリー」にあたり、マイケル・ナラビアにとっては「父のカントリー」にあたる土地）にしか残されていなかった。彼は、2人の姉妹がナラビアの妻であったことに加えて、土地の正当な継承者であるナラビアを成員にむかえることによって、現在地にガマディ「むら」を建設し得たのである。したがって、比較的境界の明瞭なこの「むら」の領域は、日常的にはリーダーのウヌウンが支配するものの、伝統的な土地権は、ウラッキ・グループのマイケル・ナラビアに帰属するものと思われる。

さて、湿地・森林複合生態系に位置するガマディ「むら」は、280 km²の領域をもつ（写真1）。その範囲は、北はバランコル Balankoru から南はジョンドモリジュン Djondmoridjune まで、西はカップル・メーレ Kappru-Mere（ブライス Blyth 川）を境に、東はネネキリ Nenekeri 湿地の東端までである。この領域のほとんどは、ブッシュファイアをくりかえしおこすことによって形成された、ユーカリ属の優占する疎林におおわれる。そのなかに、ゴバルバル Gobarbal、ロールガエラ Rolgaera、ボボロク Bobolok などのクリークや、ネネキリをはじめとする大小の湿地が分布する（図4）。これらの疎林・クリークと湿地が日常的な狩猟の場を提供し、「むら」人がおこなう木皮画（ストリンギー・バーク *Eucalyptus tetrodonta* の樹皮に、

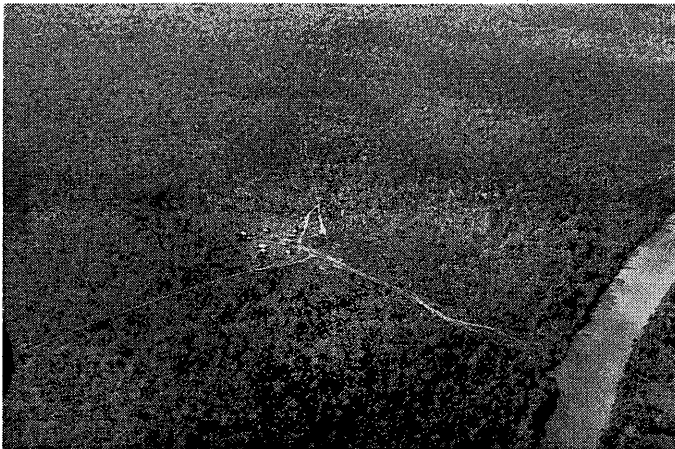


写真1 ユーカリ属が優占する林にひらかれたガマディ「むら」

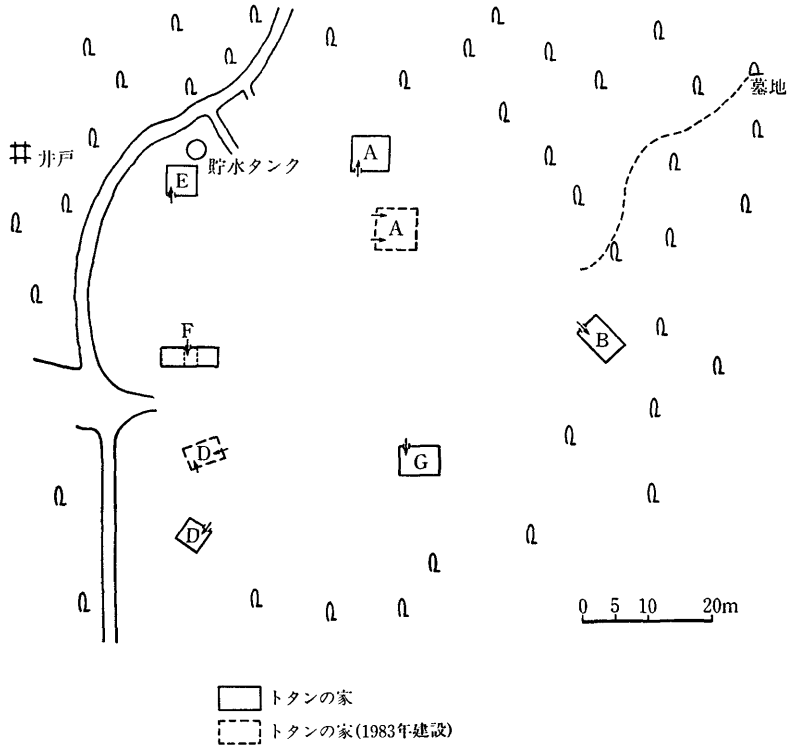
オーカーや木炭で描かれる神話や伝説)の製作など、市場指向型の経済活動 [ALTMAN 1980: 87-107, 1982: 14-17] の材料を提供する。

このように、野生食糧を含めた日常的な資源の開発は、この領域内ではほぼ完結するが、「むら」人はカップル・メーレ (ブライス川) 対岸でも狩猟をおこなうことがある。この地域、つまりヤルバル Yalbal 湿地とクイチェ Quitje 周辺の疎林とは、隣接するバララ族・レンバランガ族とジナン族との緩衝地帯であると「むら」人に認識されている。これはおそらく、伝統的な狩猟採集時代に存在した、相接する2つの部族の間であって帰属が不明な土地 [ELKIN 1981: 56] と、同じ性格をもつものと思われる。この地域を含めて、ガマディ「むら」の人びとの狩猟活動は、領域内ではほぼ完結する。しかし、そこでの狩猟は排他的におこなわれるわけではない。近隣のアウトステーションの成員もまた、ときおりガマディの領域で狩猟に従事する。これらの人びとがおこなう資源の開発には、事前にリーダーの許可を得るか、もしくは成員の同伴を必要とする。このように、1975年にあらたに建設されたアウトステーションつまり「むら」は、明確な領域をもち、そこでの資源の開発が「むら」成員を基本とするものの、他者を排除しない。これらの事実から、この「むら」は、いわゆるホルド [WARNER 1964: 127-129; TINDALE 1974: 12, 15-30] に類似した性格をもつと考えられる。

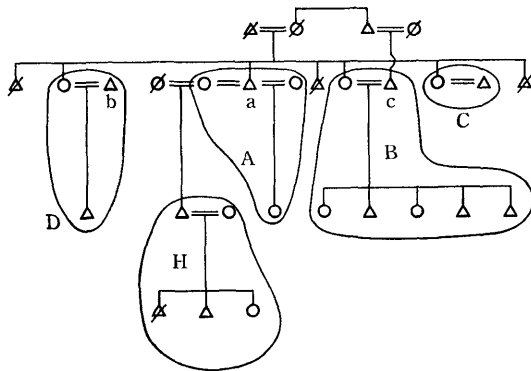
ii) 「むら」の人口

ガマディ「むら」の人口規模には、かなりの変化が認められる。人口が明らかかな年に限っても、1977年23人、80年8人、82年19人、84年7人、86年11人(いずれも乾季)で、7~23人の幅がある。しかし、その成員は20人を数え、マニングリダ管区に存在する23のアウトステーションの平均人口20人(1982年10月現在)に一致する。ガマディは平均的な人口規模をもつ「むら」である。

その人口は、「むら」成員の移動と、近縁なローカル・グループのメンバーの一時的居住などによって、毎日のように変化する。そこでまず、ガマディの成員をみると、この「むら」のメンバーは、土地権をもつマイケル・ナラビアを含めて、リーダーのジャッキー・ウヌンと血縁関係にある人びとに限られている(図5)。これらのうち、1年をつうじてガマディに生活するのは、リーダーの家族4人だけである。乾季の間は、これに加えてCとDの2家族がこの「むら」に生活の拠点をおいている。したがって、「むら」を支えるのはリーダーとC・Dの3家族9人と判断され、これがガマディの基本人口である。しかし、その出自は一様ではない。すでに述べたように、ジャッキー・ウヌンはジナン族のモロゴン・グループの出身であり、その2人の妻



貯水タンクと井戸(1986年完成)、風車でくみあげた水をパイプで貯水タンクへおくる。
 EとGは空屋。Fはマーケット・フーズを一時的に貯蔵したかつてのshop。



A~D, H 居住家族
 (HはジマラJimarda「むら」に、
 Bはマニングリダ Maningrida
 に本拠地をおく。Cはトタンの
 家をもたずテント生活)

- a Jacky WunuWun
- b Johnny BulunBulun
- c Micheal Narapya

図5 ガマディ「むら」の成員と居住家族

はともにバララ族の出身である。また、居住家族Dの夫ジョニー・ブルンブルン Johnny BulunBulun は、ジンバ族のガナルビンゴ Gunalbingu 氏族の出身で、リーダーの姉妹と結婚し妻方に居住することで、この「むら」の成員権を得ている。

この基本となる3家族を除く他の家族は、ガマディ「むら」の成員であるにもかかわらず、マニングリダの「まち」に生活の本拠をおいている。これらの人びとは、ときに応じて「むら」と「まち」を往き来し、乾季の1週間から1カ月ほどを「むら」ですぐすのである。

こうした成員の移動のほかに、近縁の氏族メンバーが一時的に滞在することによっても、「むら」の人口は変化する。たとえば1986年10月から11月にかけては、成員以外に常に3～8人の滞在者があり、ときにはそれが成員数をうわまわることさえある(11日間にわたって、こうした現象が認められた)。これらの滞在者の生活は、領域内での狩猟(常に成員と帯同しておこなわれる)や「まち」から供給されるマーケット・フーズの購入など、すべてにわたって成員とかわるところがない。

「むら」の人口の変化をもたらすもうひとつのおおきな原因は、儀礼である。1984年9月にこの「むら」で1週間にわたっておこなわれた葬送儀礼には、成員12人のほかに135人が参加し、人口は一挙に150人ちかくにふくれあがった。また、モロゴン・グループのトーテム(ドリーミング gulugulung)である明けの明星(彼らの祖先は、明けの明星から生れたと伝えられている)をたたえるマラジュレ maradjiri の儀礼(写真2)には、18人の成員のほか、グループのメンバー22人が参加した。この儀礼がおこなわれた86年9月下旬からの2週間は、儀礼直前の3倍に人口が増加したのである。

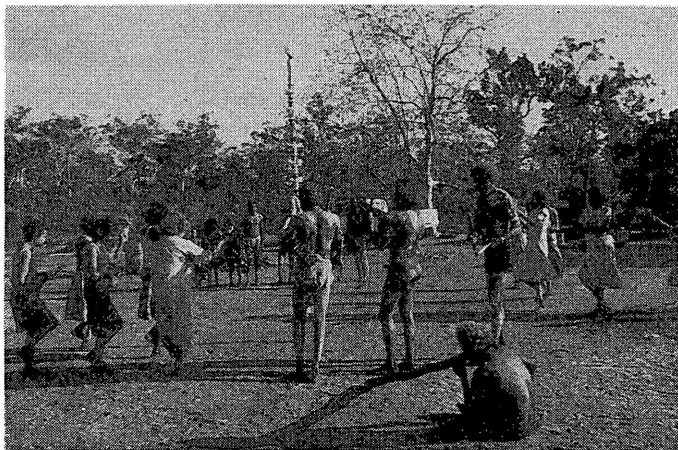


写真2 マラジュレ maradjiri 儀礼

このように、「むら」の人口はきわめて流動的である。それには、儀礼期間における多数の人びとの一時的な滞在を可能にするうえで、獲得可能な食糧の量がおおきく影響したという [WARNER 1964: 128]。この傾向は、80年代にも認められる。乾季にはマーケット・フーズを含め、食糧が比較的容易に入手できる。そのうえ移動が容易なため、この季節にはしばしば儀礼がおこなわれ、それが極端な人口増加をもたらしている。これに反して、雨季はトラックでの移動が困難で、マーケット・フーズの供給も途絶えがちである。そのため多くの人びとは、「まち」の便利さを求めて、雨季の直前に「むら」を出る。その結果、ガマディ「むら」の人口は、リーダーであるジャッキー・ウヌウンの家族4人に減少する。「むら」の人口規模は、季節とそれにとまなう食糧の変化、儀礼の有無とに、ふかくかかわっているのである。

2. 狩猟動物と狩猟頻度

i) 狩猟動物の季節性

湿地・森林複合生態系の狩猟動物は、かなり豊かである。湿地とその周辺には、カササギガンをはじめツル *Grus rubicunda* やコウノトリ科に属する *Xenorhynchus asiaticus* といった大型の鳥、それにカモ *Dendrocygna* spp. があり、クビナガガメや水牛が狩猟の対象となる。湿地をとりまく疎林では、ワラビー、エミュ、ゴアナ *Varanus* spp. が開発される。また、河川やクリークには、バラマンディやナマズなどの各種の魚類があり、河辺林にはワニの卵が得られる。これらのうち、ガマディ「むら」の人びとが主要な狩猟対象とするのは、湿地のガンとカメ、および疎林のワラビーである。

1984年8月から9月にかけての乾季の34日間、計66回の食事内容の調査では、50.6

表1 野生食品とマーケット・フーズの出現頻度

野生食品	頻度	率	マーケット・フーズ	頻度	率
カササギガン	26	65.0	ダンパー*	16	41.0
クビナガガメ	4	10.0	コンビーフ缶	7	17.9
ワラビー	3	7.5	米の粥	5	12.8
ゴアナ	2	5.0	ビスケット類	5	12.8
水牛	2	5.0	パン	4	10.3
ナマズ	1	2.5	その他	2	5.2
その他	2	5.0			
	40	50.6		39	49.4

(1984.8.2.-9.14の34日間、計66回の食事内容の調査による。のべ食品数は79。)

* 水で練った小麦粉を焚火の燻にうめるか、フライパンで焼きあげた食品。かつてはその原料にソテツ *Cycas angulata* の種子などが用いられた。

％を占める野生食品のうち、ガンの出現頻度がもっともたかく、ついでカメ・ワラビーとなる（表1）。しかし、これらは1年をつうじて捕獲が可能であろうか。

一般にアーネムランド・アボリジニは、狩猟動物の移動や採集すべき植物の成長と、それをもたらす降雨量や乾燥度にもとづいて、季節を区分する [BERNDT and BERNDT 1970: 31-33, 1985: 111; LEVITT 1981: 23-24]。したがって、ガマディ「むら」の人びとがおこなう季節区分をみることで、これら狩猟動物の季節性が明らかになるはずである。彼ら「むら」人は、まず乾燥度(湿潤度)によって1年を乾季 *mangetje* または *rarandjar* と、雨季 *djanbalge* に区分する。ついでそのそれぞれを、ユーカリ属の花期や水草の成長などにもとづいて4～5に区分する。つまり1年を8季 [BORSBOOM 1978: 76] ないし9季に分けているのである（表2）。そのなかで注目されるのは、筆者が聞き取りの結果作成した9季区分の指標に、ネネキリ湿地へのガンの去来と産卵時期が認められることである。

この区分を採用しているガマディ「むら」の主要な成員が、この領域の伝統的な居住者でないことは、さきにも述べた。したがって、ガンが季節区分の指標に登場するのは、ウラッキ・グループの区分をそのまま踏襲したか（成員の1人マイケル・ナラビアはウラッキの出身である）、モロゴン・グループがこの地に「むら」を建設した後、彼らの季節区分にガンの去来を加えた結果かの、どちらかであろう。いずれにしても重要なことは、乾季のおわり（ワレル・ンゴレ・モルジラ *walir-ngore-mordjila* ほぼ11月にあたる）から、雨季がはじまるころまで（ンゴレ・マイヨルク *ngore-maiyoruk* 12月下旬から1月上旬ごろ）、ネネキリ湿地にはガンがいなくなることである。ネネキリ湿地が干あがるこの季節には、ガンが水のある、より大きい湿地（たとえばアラフラ湿地やヤルバル湿地の一部など）へ移動するからである。したがって、この「むら」の人びとは、領域内で狩猟をおこなう限り、この期間はワラビーその他に野生食糧を求めなければならない。

しかし、この季節から雨があがり乾季がはじまるリチア *ritjia* まで、「むら」の人口は4人（リーダーとその2人の妻、および子供）に減少する。そのため、ガンがいなくなる3カ月ほどの間は、湿地周辺での水牛や疎林でのエミュといった大型動物の狩猟が困難で、狩猟動物はカメと魚類に限定されてくる。ワラビーは乾・雨季をつうじて疎林に多数棲息するとみられるが、リーダーのジャッキー・ウヌウンは、それを供することが許されない。仮りにワラビーを捕獲しても、それは2人の妻と子供の食糧になるだけである。自然資源の開発には、資源がもつ季節性ととも、もうひとつ別の規制がうまく作用しているのである。これについては、後に詳しく述べることに

表2 ジナン族の季節区分

8季区分は Borsboom [BORSBOOM 1978: 76] によった。9季区分は筆者の調査による。

月	9季区分	区分の指標	8季区分	区分の指標
7	Marowoul	もっとも涼しい季節。つめたい風が吹く。ガンの子供が成長する。ユーカリ属の花がおわる。	Mattai	ユーカリ属の花が咲く。
8	Mangetje (Rarandjar)	乾季。この季節のはじめはつむじ風が吹く。ブッシュファイアがひんぱんにおこる。湿地にはまだ水がある。	Rarandjar	乾季。南東風が卓越する。
9				
10				
11	Walir-Ngore-Mordjila	乾季のおわり。もっとも暑い季節。湿地は干あがり、ガンはいなくなる。	Walir	乾季のおわり。もっとも暑い季節。
12	Wulma	北西の季節風がときおり雨をもたらず。嵐が吹きあれる。	Wulma	北東の風がときおり雨をもたらず。嵐(雷雨)が吹きあれる。
	Ngore-Maiyruk	雨季。雨のはじまり。ガンがネネキリにもどりはじめる。イヌクログワイが成長をはじめ。	Bara	北西の季節風が吹きはじめる。草が成長をはじめ。
1	Ngore-Maiyruk-Wanna	大雨の季節。水草が成長する。	Gummaal	雨季。毎日雨がつつく。西または北西風が卓越する。草が成長する。
2				
3	Djanbalge	雨季のさかり。ユーカリ属の木や下草が大きく成長する。		
4	Djololo	雨があがりはじめ、ガンは卵を生む。ユーカリ属の花が咲きはじめる。スイレン属が成長する。	Djmororo	東風が卓越する。規則的な雨があり、ときおり強風が吹き、草がたおれる。
5			Midawar	東風が卓越する。涼しいときで、草は枯れはじめる。
6	Ritjia	乾季のはじまり。強い東風が吹く。草は枯れる。	Mattai	ユーカリ属の花が咲く。

する。ここでは、カササギガンをはじめとする狩猟動物の狩猟頻度と、現在の「むら」人が採用している狩猟のストラテジーを、さきに検討する。

ii) カササギガン *Anseranas semipalmata*

ガマディ「むら」の食品構成によれば、カササギガンは、少なくとも乾季の一時期、主要な野生食糧の地位にある（表1参照）。したがって、ガンの捕獲頻度は相対的にたかくなり、捕獲数は「むら」の人口規模と棲息数に対応して変化するはずである。

季節区分（表2の9季区分）によると、ガンの捕獲が比較的容易な期間は、雨季のさかりから乾季のおわりにかけてである。このうち、「むら」の人口と狩猟回数・捕獲数が明らかな乾季を、①人口規模が3～10人で「むら」が通常の状態にある時期（1984年8月1日～9月9日の40日間）と、②「むら」の人口が43人にまで増加したマラジュレ儀礼の期間中（1986年9月26日～10月11日の16日間）の2つに区分する。また、ネネキリ湿地にガンが飛来しなくなる、③乾季のおわりから雨季のはじめ（1986年10月23日～87年1月6日のうちの61日間、人口は2～19人の間で変化）をさきの2区分に加え、それぞれの状況におけるカササギガンの狩猟頻度と捕獲数について検討する（この区分はワラビーとカメについても用いる）。

表3によると、①および②の時期においては、ガンの狩猟頻度は0.5～0.7/日と相対的にたかい。また、その狩猟効率1.7～3.8は、きわめて効果的に捕獲されていることを示す。これらは、ガンがもっとも重要な狩猟動物であることを明らかにする。その狩猟地は、①の期間における52.4%が集落の内部にもとめられている。この季節には日没前後の時刻に、集落の上空を群れが通過するからである。②の期間にも同様の現象が認められるが、儀礼のさまたげになるため、集落での狩猟はおこなわない。狩猟地は集落からネネキリ湿地に移動する。狩猟の時間帯は特定されないが、午前中におこなわれることが多い。湿地には多数のガンが棲息しており、狩猟効率をたかめる結果となっている。

しかし、1人当たりの可食食糧は、両者の間で大きく変化する。②の儀礼期間中には、捕獲効率の向上にもかかわらず、その値は半減する。通常の3倍の人口を支持し、かつ儀礼をとどこおりなく進行するためには、3.81の効率で322gの可食食糧を開発するのが、おそらく限界であろう。これに対して、③の季節には効率・捕獲量ともに低下し、ガンは主要食糧の地位から脱落する。この時期、「むら」の領域内ではガンの狩猟ができないからである。その狩猟地は、カップル・メーレ（ブライス川）対岸の湿地、ヤルバルのごく限られた地点に移っている。1回の狩猟に要する時間が①・②の2倍強に達するのは、こうした事情による。

表3 狩猟頻度と狩猟効率

	獲物	狩猟頻度/日	1狩猟当たり平均捕獲数 ¹⁾	1狩猟当たりhunterの数	1狩猟に要した時間 ²⁾	1人当たりの平均可食量 ³⁾ g.	狩猟効率 ⁴⁾
①乾季 (通常)	カササギガン	0.5	6	3	2 hs 05	614.2	1.68
	ワラビー	0.1	1	1	1 hs 54	33.5	6.32
	クビナガガメ	0.15	4	2	5 hs 36	45.0	0.27
	魚	0.05	2	1	2 hs	6.7	0.90
②乾季 (儀礼期間)	カササギガン	0.7	9	2	2 hs 04	321.9	3.81
	ワラビー	0.1	1	1	不明	43.7	—
	クビナガガメ	0.1	3	2	4 hs 07	23.8	0.28
	魚	—	—	—	—	—	—
③乾季 末～雨 季初	カササギガン	0.1	3	2	4 hs 33	69.8	0.57
	ワラビー	0.4	1	1	2 hs 04	552.1	5.82
	クビナガガメ	0.2	6	2	6 hs 28	73.2	0.36
	魚	0.5	5	2	4 hs 47	139.9	0.47

注 1) 「むら」にもちかえった狩猟動物の平均

2) 「むら」を出てからもどるまでの時間

3) 捕獲総数を生体重に換算し、ガン・カメ0.3, ワラビー0.25, 魚0.4の廃棄率をかけて延べ人口で除した値

4) ハンター1人1時間当たりの捕獲数にそれぞれの獲物の生体重をかけ、廃棄率を除した値

このようなカササギガンの狩猟には、いくつかの特色が認められる。そのひとつ、①の期間に集落でおこなわれる狩猟は、この「むら」が Binford のいうフィールド・キャンプ（狩猟活動の拠点）であり、ステーション（まちぶせ地点）、ロケーション（捕獲地点）であることを示している [BINFORD 1980: 4-20]。狩猟効率のたかさは、「むら」がもつこういう性格にもとづくのである。またトラックおよび徒歩（3つの期間をつうじて徒歩による狩猟は1割に満たない）でのネネキリ湿地における狩猟では、ガンの鳴き声で群れの大きさと所在をまず確認する。それには、A 地点で鳴き声を聞いて群れの大きさを確かめ、約 100 m 離れた B 地点で同様のことをおこなって、群れの所在を知るという方法が採用される。この一種の三角測量は、湿地に棲息するガンの数が相対的に減少する乾季のおわりごろに特徴的である。これに対して、数多くのガンが湿地に群れる季節には、この種の狩猟法を採用する必要がない。

ところで、散弾銃（1960年代前半からアーネムランド・アボリジナル領での使用が公認される）を用いておこなう現代の狩猟に比べると、かつての方法は狩猟効率が低いと推測される。当時は、木製のヤリ galewaru とヤリ投げ器 dakkaru を携えた 8～12人のハンターが夕方に湿地周辺の樹上に登り、この時刻に移動するガンを射止めたという。この方法では、1日1回の狩猟が不可欠であったとされる。そのほか、伝統

的な狩猟法におとり穴 dappe 猟がある。これは深さ約 150 cm、直径数 10 cm の堅穴を湿地に掘り、水草で覆った中にハンターが入り、鳴きごえをまねておびきよせたガンの足を掴み引きずり込むというものであった。このおとり穴猟は日の出の時刻におこなわれたという。いずれもガマディ「むら」に伝承される、かつての狩猟法である。

iii) ワラビー *Macropus* spp.

カササギガンが効率よく捕獲される乾季 (①・②の時期)、ワラビーは、補助的な野生食糧の地位にある。1人当たりの可食食糧が、34~44 g ときわめて小さいからである (表3)。このワラビーが、主要食糧の地位を獲得するのは、乾季のおわりから雨季のはじめにかけてである。この時期には狩猟頻度が増加し、「むら」の人口規模が小さいこともあって、1人当たりの可食食糧は 500 g をこえる。この状態は、雨季がさかりになるころ (ンゴレ・マイヨルク・ワンナ ngore-maiyoruk-wanna 表2) までで、それ以後は、その地位を再びガンにゆずると予想される。

しかし、ユーカリ属の疎林にかこまれたガマディの集落周辺には、個体数は不明だが、1年をつうじて多数のワラビー (写真3) が棲息すると推定される。その根拠のひとつは、①・③の2つの時期ともに、狩猟効率が著しくたかく、かつその値にほとんど変化がないことである。棲息数が少なく、そのうえ季節変化がおおきければ、こうした効率を維持できないはずだからである。

ワラビーが多数棲息すると推定する根拠の2つめは、集落周辺に残された足あとである。筆者の観察によると、集落から半径 100 m 以内に1日平均9つの足あとが見い出され、その数は乾季 (①の時期) と、乾季のおわりから雨季のはじめ (③の時期)



写真3 ワラビー (生体重量約 16 kg)

との間に変化がない。これらは、同一個体のものという可能性も残されている。しかし、足あとから判断すると、ワラビーは集落の東から西へまわり、北の森へ移動していることが知られる。同一個体が、集落を中心に円運動をしているとは考え難い。

このように、多数の棲息が推定されるワラビーの狩猟は、主として集落の北の森でおこなわれ、ここでの捕獲数は56%に達する。これにつぐのが、乾季には草原をなすカップル・メーレ（ブライス川）対岸のヤルバル湿地である。ワラビー猟はこうして狩猟地点が特定されるところに、おおきな特色がある。したがって、その戦略は、「偶然の発見」[BINFORD 1980: 4-20]によらない、計画性をもったものと判断されるのである。

iv) クビナガガメ *Chelodina rugosa*

クビナガガメは、季節を問わず補助食糧であることが、1人当たり可食食糧の値から明らかである。このカメは生体のまま一時的に貯蔵できる唯一の動物性食糧で、「むら」人はそれぞれの居住家族ごとにカメ穴（最近ではこの用途にドラム缶がしばしば使われる）を設けておき、必要に応じて食用に供する。こうした利用法は、補助食糧としてのカメの性格をよく示すものである。

その狩猟にはおもに女性が従事し、1回当たり4～6時間30分を要している。この狩猟時間の長さは、狩猟方法に由来する。ネネキリ湿地をはじめ、ジョワルエヤヤルバルなどでおこなうカメ猟には鉄棒が使用され、これで地中のカメをさぐり出すのが一般的である。そのため、相対的に長い狩猟時間が必要とされ、狩猟効率を低下させているのである。

現在、ガマディ「むら」で女性がおこなう狩猟には、マングローブ林での貝 (*Geloina* sp. など) とりと、カップル・メーレ（ブライス川）での釣りがあつた。しかし、その狩猟頻度はきわめて低く、カメ猟だけが「むら」人の食糧獲得に貢献しているにすぎない。

v) エミュ *Dromaius novaehollandiae* と水牛 *Bubalus bubalis*

湿地・森林複合生態系で捕獲可能な大型動物は、エミュと水牛である。このうち、18世紀にチモールから導入され、その後野生化した水牛（写真4）が、ガマディ「むら」周辺にどれほど棲息するのか、まったく不明である。ネネキリやゴバルバル湿地の周辺では、しばしば新鮮な足あとをみかけ、泥浴のあとが数多く認められる。

この水牛は湿地周辺でおこなわれるが、狩猟頻度はきわめて低い。筆者の観察した乾季のさかりから雨季のはじめにかけての117日間では、わずかに3回みられたに

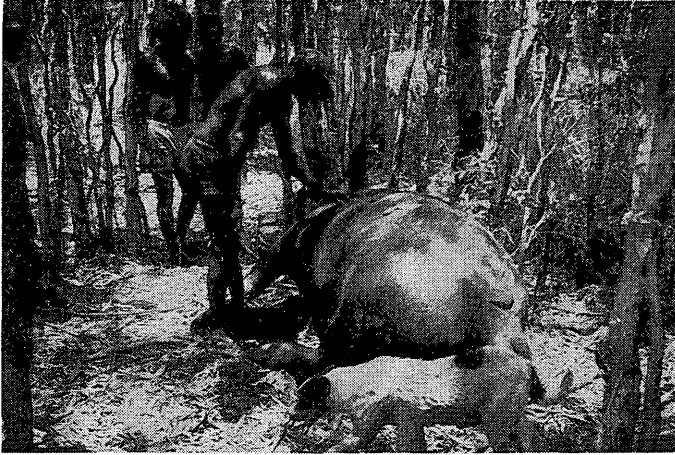


写真4 水牛

クリークへの水くみ途中に発見し、射止めた水牛。食用に供した肉は、胸の一部と、左の前肢と後肢のみ。残余の肉はそのまま放置。左後肢はとなり「むら」へ配分

とどまり、捕獲できたのは2度である。これはともに、エミュの狩猟や飲料水をくむために湿地にでかけた際、発見されたものである（彼らは移動に際して、必ず散弾銃を携行する）。こうした事実は、水牛の捕獲を直接の目的にする狩猟が、ガマディ「むら」ではほとんどおこなわれないことを示している。

この水牛と同様、エミュもきわめて得がたい大型動物である。その狩猟はさきと同じ117日間に4回認められるが、1度も捕獲されていない。このうち3回の狩猟は、いずれも日の出前後の時刻に、湿地でおこなわれる。疎林に棲息するエミュは、この時刻に1度は湿地にあらわれて水を飲むからだという。ハンターはそれを樹上でまちぶせる。これが、現在のガマディ「むら」に採用されているエミュ猟のストラテジーである。したがって、1狩猟には平均5時間を必要とする。それにもかかわらず1度も捕獲されていないのは、エミュが出現する湿地を特定するのが困難なことによる。この3回の狩猟で、ハンター（同一人）がネネキリ、ゴバルバル、ボボロクと狩猟地をかえているのは、こうした事情を反映したものである。ただし、この方法では、「むら」領域内の湿地が干あがる季節は、エミュ猟がより一層困難になる。

残る1回は、トラックで移動中に疎林内で偶然発見したものである。この場合に注目されるのは、エミュを追跡するハンター1人を除いて、車に残った人びとが、ゆっくりとしたリズムをとりながら平手で車体をたたくことである。これはエミュの羽音をまねる行為で、追跡中のエミュが遠くへいくのを防ぐためだと説明される。しかし、



写真5 バラマンディ

その効果は明らかでない。

これらのほか、伝統的なエミュ猟には、湿地に毒を流す方法も採用されていた。西アーネムランドでは、これに *Tephrosia purpurea* の葉を使用したというのが [BERNDT and BERNDT 1985: 115], 筆者はまだ確かめていない。

vi) 魚介類とドロガニ *Scylla serrata*

ガマディ「むら」の人びとが捕獲する魚介類には、バラマンディ *Scleropages* spp. (写真5) やナマズ、エイやサメなどと、3種類の貝類がある。これらのうち、バラマンディとナマズの狩猟は、集落前面のカップル・メーレ (ブライス川) と、領域内のモゴロンジェ Mogolondje, および隣接部族との間の帰属が不明瞭なクイチェとでお

こなわれる。このほか、まれにボボロクなどのクレークも狩猟地となる。

一方、残余の魚介類とドロガニは、集落の北方 40 km のバーラマルチゲ Baalamaltjige, チンボルジョウガ Tinbordjouga, ゴモゴモク Gomogomok やミジエレ Midjele のマングローブ林内と林縁が狩猟地に選ばれる (写真6)。ミジエレを除くこれらの地域は、バララ族のアウトステーションのひとつ、ガンムルグユル Ganmurguyur の領域に属する (図4参照)。したがってガマディ「むら」の人びとは、事前に狩猟する旨を伝えて許可を得ることが必要である。筆者の観察期間中におこなわれたこの地域での狩猟には、ガンムルグユル「むら」の成員2人が、狩りに同行している。

こうして、湿地・森林複合生態系に位置するガマディ「むら」では、領域内で獲得できない資源の開発を、海岸・汽水・湿地複合生態系でおこなう。しかし、その頻度は0.3/日と低く、狩猟時期も乾季がおわる11月に集中している。すでに述べたように、この季節にはカササギガンの捕獲数が著しく減少し、野生の動物性食糧はワラビーとカメに依存しなければならない。こうした期間に、異なる生態系で魚介類が開発されるのである。その1人当たり可食食糧は約 140 g を示すが、ヤス jitabata を用いておこなう突刺漁やナイロン糸を使う投げ釣りには5時間を要し、狩猟効率はいかたか



写真6 マングローブ林内のドロガニ猟。捕獲にはヤス jítabata を用いる

い（表3）。領域内における河川やクリークでの狩猟についても同様である。儀礼の期間中に魚介類の狩猟が認められないのは、こうした理由による。

ところで、この河川やクリークでの釣り漁には、注目すべき行動が認められる。それは魚のよびよせ行動である。たとえば、1986年11月3日のクイチェでの5時間18分にわたるバラマンディ漁（ハンター3人、釣り餌には散弾銃で捕獲した小鳥が使われる）では、狩猟地点を移動するごとに（図6）、よびよせがおこなわれた。そのよびよせ行動とは、つぎのように精霊によびかけることである。

koie ma kettobun tjitjtija bai.

魚 が 釣りたい 早くこい

midjuwuwa koiyo koiyo wanna ple

精霊よ 魚を 魚を 大きいのを

ngale barinne koige midjuwuwa

私は 空腹だ 魚は 精霊（がくれる）

tjutju kettowue koie ma

早く 釣れるよう 魚 が

釣り糸を投げこむたびに、大声でよびかけることで、精霊が魚をもたらしてくれると彼らは信じている。カササギガンやワラビー、エミュなどの狩猟にも、この例のように精霊によびかける——陸棲動物の場合は声をださない——ことが、かつてはおこなわれたという。散弾銃の導入による狩猟効率の向上は、こうした習慣を消滅させていったのであろう。効率のわるい釣りに、それが残されたのである。

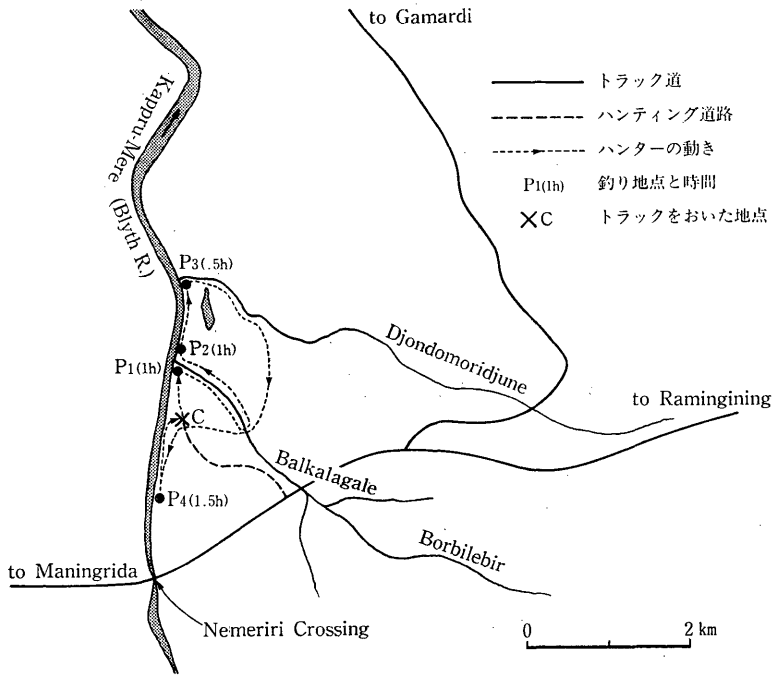


図6 クイチェでのバラマンディ釣りの行動

IV. 食物規制と解除法

1. 食物規制とその範囲

湿地・森林生態系の狩猟動物は、ガマディ「むら」の人びとによってことごとく捕獲されている。しかし、2つの例外がある。それはワニ（卵を除く）とツルである。この2種の動物は、多くの人びとやローカル・グループのトーテム（ドリーミング）となり [小山 1985: 11, 16, 1986: 75], 木皮画のモチーフにしばしば採用される [松山 1986: 86-87]。

このツルがガマディで捕獲されないのは、リーダーのジャッキー・ウヌウンが継承するモロゴン・グループのトーテムだからである。また、「むら」人のトーテムでないワニを捕獲しないのは、近年ワニ猟が禁止されたことによる。この2種類を除く動物が、「むら」人の狩猟対象である。しかし、捕獲された動物は、すべての「むら」人が食用に供し得るわけではない。ウヌウンはワラビーを供することが許されない。同様に、ガナルビンゴ氏族出身の居住家族Dの夫、ジョニー・ブルンプルン（図5参照）は、クビナガガメを食糧に加えることが許されていない。ワラビーはウヌウンの、

クビナガガメはブルブルンのトーテムのひとつであり、これを共有する近親者（この場合には兄弟と父）が死亡したからである。食物規制はこうして発生する。その解除には、定められた手続き——解除の儀礼——をとることが必要である。ウヌウンとブルブルンは、それをまだおこなっていない。

i) トーテム（ドリーミング）

食物規制の発生はトーテム（ドリーミング）と深くかかわるのである。そのトーテムは、兄弟姉妹が共有するメイン・トーテムというべきものと、ローカル・グループや半族の成員が共有するものとにわけられる。たとえば、ウヌウンはワラビー ngalko・チョウ bomba・ヤムイモ baritje・筌 djimaburan・水草の一種 wunuwun とツル yaratta をトーテムとして父から継承し、兄弟姉妹と共有する。これが彼のメイン・トーテムで、それに加えて、明けの明星やアリ塚、汽水に棲息するタイの一種、海など、確認できただけでも17以上になるモロゴン・グループのトーテム（ドゥア半族のトーテムでもある）を同時にもっている。これら多数のトーテムは、2つに整理できる。そのひとつは創世神話ないし祖先神話に由来するものであり、2つめはローカル・グループ本来の居住域の生態系にふかくかかわるものである。ウヌウンの場合を例にとれば、筌は、創世神話に登場する文化英雄、チャンカオ Djangkaow とマンボ Munbo が人びとに与えた狩猟具とされる。また、明けの明星は、モロゴン・グループが生れた星である。これを除く数多くのトーテムは、居住域の生態系にもとづいている [BORSBOOM 1978: 37-38]。海・水草やタイの一種は、海岸・汽水・湿地複合生態系に由来し、ワラビーとチョウやアリ塚、それにツルは湿地・森林複合生態系に由来する。河辺林として残された降雨林からは、ヤムイモがトーテムになっている。これらのトーテムは、葬送の儀礼をはじめ各種の儀礼でうたい踊られる。そのうたと踊りには、動・植物の生態が表現される。たとえばツルのうたでは、

mandin mandin

歩く 歩く

kowrtja rorororu

鳴きながら (?)

tjarukumele yarrata

巣をつくる ツル

ritjia djala woareluga djala

*リチアが はじまる ひなが かえる

wippundja koyowruga ndala

(ひなが) たちあがる おきあがる

djomu djomu dja

夕方に 夕方に なる

wourai wourai rartjiyon

飛ぶ 飛ぶ 話しあう

mandin mandin

歩く 歩く

karbu raigo koruburnga

クワイの根を ほる**コルプルンガで

bolok parpar tja

羽が 風に 動く

* 乾季のはじまる季節

** コルプルンガは湿原の地名

とうたわれる。踊りではツルの群れが湿原を歩き索餌し、ひなが生れ、群れをなして飛びたつ様子が表現される。このように、彼らのトーテムには、居住域における動・植物の生態との間に不可分な関係が認められるのである。その一方で、これらのトーテムは、彼らの祖先の生れかわりであり、祖先の精霊がもたらしてくれる狩猟(採集)動物(植物)であると信じられている。クリークでの釣り、魚のよびよせ行動がみられるのには、こうした背景がある。

このように由来の異なるいくつかのトーテムにあって、メイン・トーテムはとりわけ重要で、それらの動・植物は、生前の生活をともにした兄弟姉妹を含む直接の祖先が生れかわったものと認識される。したがってその肉を食用に供することは、死者の肉を食用に供することになる。ジャッキー・ウヌウンがツルやワラビーを供し得ないのは、これを共有する兄弟のうち3人が近年になって死亡したからである。メイン・トーテムは、具体的なイメージをもつ人間と同一視されるのである。

こうした性格をもつトーテムと、それにまつわるうたや神話、踊りは、父系出自にもとづいて継承される。その伝達の具体的な手段ないし装置のひとつが木皮画であり、星まつりや葬送の儀礼をはじめとする各種の儀礼である。そこでは、個人やローカル・グループのトーテムをうたい、おどるのである。このように、男性は伝達のための社会的な装置をもつが、女性はそれをもたない。女性は自らのトーテムを木皮画に描くこともなければ(木皮画の製作は男性に限られる)、儀礼に際してそれを積極的に踊

ることもない。彼女は自らのトーテムを直接的な形で表現しないのである。それはこの社会が、父系の単系集団を基礎に編成されていることによる。

トーテムを伝達するもうひとつの手段は、人の名前である。再びウヌウンを例にとると、彼は汽水域に特徴的な水草 wunuwun を名前にもっている。これは彼のトーテムであると同時に、祖父の名前でもありトーテムでもあった。同様にジンバ族ガナルビンゴ氏族のメンバーであり、ガマディ「むら」の成員でもあるブルンブルンは、祖父の名でありトーテムであるクモ bulunbulun（ジンバ語）を名前にもつのである。彼の兄弟はそれぞれ祖父の兄弟がもつ名前（トーテム）を継承し、彼の息子はブルンブルンの父のトーテム、雲を継承する（図7）。これらのクモや雲は、ブルンブルンの兄弟姉妹が共有するトーテムである。ただし、彼らが継承する名前は、ひとつではない。たとえばブルンブルンはクモのほかにもうひとつ別の garru とよぶクモとクビナガガメ banda（ジナン語、このカメをさすジンバ語は採録からもれた）の少なくとも3つの名をもつ。同じく彼の弟は、2種類の水へビ galamitja と yangaigai

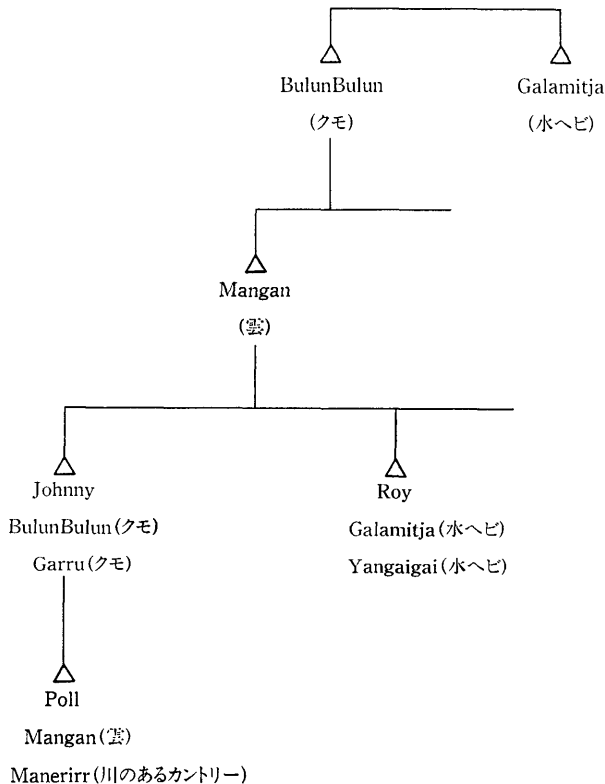
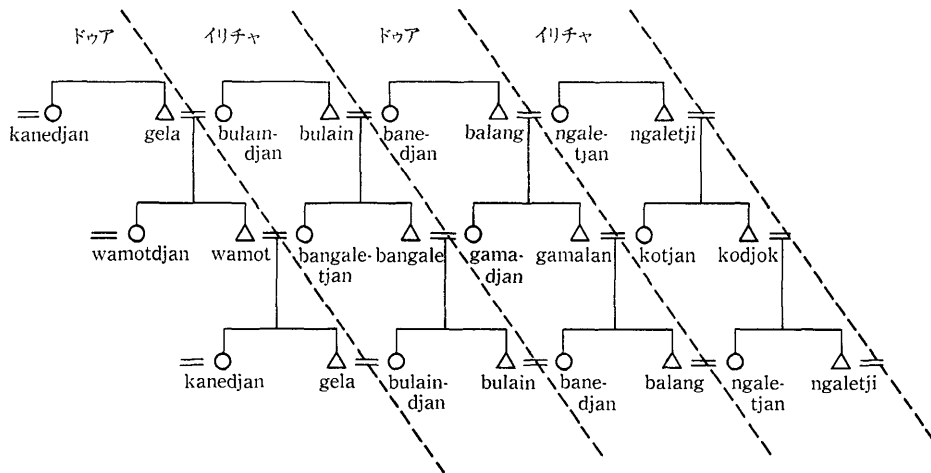


図7 トーテム（ドリーミング）の継承



ワモット wamot はバンガレチャン bangaletjan のセクションの女性のほか、コチャン kotjan からも妻を選ぶことができる。この場合、伝統的にはバンガレチャンとの結婚が優先し、2人めの妻はコチャンのセクションから選ばれる。ガマディ「むら」のリーダー、ジャッキー・ウヌウンの最初の妻(死亡)はバンガレチャンから、2人めの妻はコチャンから、そしてプロミスト・ワイフ²⁾はバンガレチャンのセクションから選んでいる。

図8 世代とセクション

を名前にする(ウヌウンも2つ以上の名をもつはずであるが、明らかでない)。

少なくともメイン・トーテムは、こうした名前としても継承されるのである。それが父でなく祖父であるのは、半族にわかれる彼らの社会がそれぞれ男女4つのセクションに区分されていることによる。ドゥア半族を例にとると、ワモット wamot というセクションに属する男性は、イリチャ半族のバンガレチャン bangaletjan およびコチャン kotjan のセクションに含まれる女性との婚姻が許される。このうちバンガレチャンとの間の息子はゲラ gela のセクションに属し、ゲラとブランジャン brandjan の息子は、祖父と同じワモットに含まれるからである(図8)。したがって、メイン・トーテムに由来する名前は、祖父からうけつがれることになる。

トーテムは、こうして個人の名前としても継承される。トーテムである動・植物と人間が同一視される根拠のひとつは、ここにも見いだせるのである。

2) プロミスト・ワイフは、Ego の母の姉妹とその配偶者によって決定される。つまり、彼らの間に女子が誕生した場合、その子を Ego のプロミスト・ワイフとする。この決定がなされると、Ego はプロミスト・ワイフになるべき女性の出生以前から結婚後にいたるまで、その両親に経済的な援助をつづけることが義務づけられる(男子が生まれた場合には、この約束は破棄される)。この義務は、プロミスト・ワイフの両親からの解除の申し出、もしくは両親の死亡のみによって解除することができる。

ii) 食物規制の範囲

このメイン・トーテムの動・植物が、兄弟姉妹を含む直接の祖先の死を契機に、少なくとも2～3年の間、食物規制の対象となる。それでは、この規制はどの範囲の人びとにおよぶのであろうか。

ジナン族に限らず、アボリジニの社会では死者について語ることがタブーとされ、特定の個人の死を想定することも許されない。そのため、近親者の死に起因する食物規制がどの範囲におよぶかを明らかにするのは、非常に困難である。筆者が得た断片的な資料をもとにその範囲を想定すると、ほぼつぎようになる。

たとえば、Egoの父が死亡した場合、食物規制は、M, FB/Z, B/Z, BS/D, S/D, FBS/D, FBSS/Dに生じることになり、父方の交叉イトコは規制の対象から除外される。また母の兄弟姉妹などは、メイン・トーテムが異なるため、その対象にはならない。母、つまり死者の妻だけが、夫のメイン・トーテムである動・植物の食用を規制されるにとどまるのである。トーテムは父系出自にもとづいて継承されるからである。

これに対して、Egoの母の死亡によって生じる規制の範囲は、まだ十分明らかでない。明確なのは、少なくとも母の兄弟姉妹に規制が生じることだけにすぎない。このほかに考え得ることのひとつは、母とは別のトーテム集団に所属するEgoとその兄弟姉妹は、おそらく規制から除外されるだろうということである。もうひとつは、母方の平行イトコで、これは死者とトーテムを共有しない。したがって、これも規制の対象外となる。問題になるのは、死者とトーテムを共有する母方の交叉イトコである。これが規制の対象になるかどうかは明らかでない。母（交叉イトコのFZ）はトーテムを次世代に直接的に伝達しないことから考えて、母方の交叉イトコは、規制から除外されると推測される。いずれにしても、現段階では、父母の死によって生じる規制は、父方の交叉イトコと母方の平行イトコにおよばないことだけが明らかである。

こうした規制をうける当事者が、何かの事情で対象となる動・植物を食べると、体全体に発疹があらわれ、激しい嘔吐にみまわれるという。人びとは、定められた手続きにしたがって、食物規制を解除しなければならない。

2. 食物規制の解除法

食物規制を解除するには、最初にワンジェル wandjil の儀礼を、ついでウォッコンリ wokkonri またはジョーク djook とよぶ、あわせて2つの儀礼が伝統的には必要とされた。その最初の儀礼ワンジェルは、葬送儀礼の一部としておこなわれる。

死因が明らかな通常の死の場合、死者の近縁の親族やローカル・グループのメン

パー、あるいはセクションを共有する人びとなどが、葬送の儀礼マネカイ *manekai* をとりおこなう。その例を、筆者の参加が許された1984年乾季に求めてみよう（これは1984年8月25日午後10時から27日正午にかけておこなわれたが、写真撮影は禁じられた）。これは、ジマラ *Jimarda* 「むら」（図1参照）のリーダーが兄弟姉妹をのこして死亡したときの儀礼である。

第1日めの午後から夕方にかけて、予想された人びとがそろると、長老が儀礼の執行を宣言する。集まった男性は、死者の半族がもつトーテム（ドリーミング）をうたいはじめる。それは海にはじまり、海鳥、ペリカン、汽水の魚、バラマンディ、ブッシュファイア、泉へとつづく。彼らは、生態系を海から疎林へとたどりながら、深夜までトーテムをうたいつづける。これが葬送のうたである。

翌日は、儀礼のリーダーである長老の、死者をたたえる演説ではじまる。死者の家のまえが掃除され、そこへ移動した男性は、夕方から午前4時まで、死者を送るトーテムのうたを夜を徹してうたいつづける。午後10時、葬送のうたがつづくなかで、集まった青年が死者の家のまえに、30 cm ほどの高さにもった土で 2×5 m の長方形をつくり、その一端に直径 1 m 深さ 30 cm の穴を設ける。この長方形は精霊の世界を、そのなかに設けた穴は、精霊が宿る泉 *water hole* を意味する。

3日め（27日）、早朝からつづくうたがおわった午前11時、長老がユーカリ属の木の葉を穴 *water hole* に敷きつめると、水を満したドラム缶 3本がはこびこまれる。再び葬送のうたがはじまり、全員が穴を囲むと、10人ほどずつが交互にその中に立ち、水を注がれる。約1時間でこの儀礼を終えると、うたい手を先頭に一団となった人びとは、「むら」の家いえをめぐる。すべての家に赤オーカーを塗るためである。葬送儀礼の2日ほどのち、精霊の世界へいきつくまでに、死者の魂 *mere* は必ず「むら」を訪問する。赤オーカーは、*mere* を「むら」に居つかせないからである。これを終え、再び死者の家のまえにもどった人びとは、死者のメイン・トーテムであるワニをうたい、それを踊る。死者の魂を精霊の世界に送りとどけるためである。興奮した女性が、硬直した体のまま倒れ伏すなかで、生前使用していた陽よけが燃やされ（本来は家屋を燃やした）、葬送の儀礼は終了する（死体はこのあと埋葬するが、それへの参加は認められなかった）。

これが葬送儀礼のあらましである。そのなかで、食物規制の解除とふかくかかわるのが、精霊の世界（長方形）につくられた泉（穴）であり、そこで水を浴びることである。これがワンジェルの儀礼で、死者を送る人の魂を清めるのである。この泉の水で清めをうけた人は、親族の死がもたらした規制から開放される。食物規制の解除で

ある。ただし、死者の兄弟姉妹は、この泉（穴）に入ることが許されない。彼らは精霊の世界（長方形）の外側にすわり、この儀礼をみまもるのであり、魂を清めることができない。したがって彼らは、食物規制が発生した直後にそれを解除することができず、比較的近縁な親族の葬送儀礼のワンジェルをまたなければならない。しかし、これにも制限がある。ワンジェルへの参加は、親や兄弟姉妹などの死後、2～3年の期間をおくべきだとされるからである。

この制限は、アーネムランド・アボリジニに一般的な二重葬と密接に関連する。さきに述べた葬送の儀礼はその1回めで、この数年後に死者の骨を掘り出し、それを砕いて円筒形の棺 *lorrokan* に入れる2度めの儀礼がおこなわれる。親族の死後、食物規制を解除するためのワンジェルは、この2つの葬儀の間にすべきこととされるのである。

ワンジェルの儀礼をおえると、食物規制が解除される。それは死者の魂メーレのブロックから開放されることを意味する。それまでは、メイン・トーテムを食用に供し得ないばかりでなく、近縁のローカル・グループの成員などへの、獲物の贈答も禁止されるのである。そして、伝統的には、これにつづいてジョークまたはウォッコンリとよぶ、もうひとつの儀礼があわせおこなわれた。これは自己の所属するグループをはじめ、近縁のローカル・グループの成員をまねき、トーテムのうたをうたわせ、狩猟動物やタバコなどを贈る儀礼である。このことによって、メーレのブロックから完全に開放されたという。

ところで、親や兄弟姉妹の死を契機に発生する食物規制は、残された兄弟姉妹をはじめ、父方の平行イトコ（父の死）や母方の交叉イトコ（母の死）におよぶ可能性がある。少なくとも残された兄弟姉妹は、確実にこの規制をうける。それにもかかわらず、ジャッキー・ウヌウンの3人の姉妹は、ワラビーを日常的な食糧のひとつにする。彼女らは、さきに述べた葬送の儀礼でワンジェルをすませているからである。

ウヌウンがこの儀礼に参加しなかった理由は明らかでないが、彼はいまなお食物規制のもとにある。その結果、ツルとワラビーの狩猟ができず、主要な狩猟動物はカササギガンと一部の魚類に限られる。ガマディ「むら」の人びとは、彼がリーダーであるところから、ツルを狩猟動物から除外している。同様にジョニー・ブルンブルンはクビナガガメがメイン・トーテムのひとつであるため、それを供することができない。彼の狩猟動物は、ワラビーとカササギガン、一部の魚介類が主要なものである。食物規制は、狩猟規制をももたらすのである。この狩猟規制は、狩猟メンバーの構成にはまったく影響しない。なぜなら、彼らの狩猟は、湿地でのカササギガン猟と女性がお

こなうクビナガガメ猟を除いて、すべて単独でおこなわれるからである。

こうして湿地・森林複合生態系における自然資源の開発は、特定の人びとの一時的な制約にもとづくにしろ、トーテムによってつよく規制されるのである。

V. ま と め

湿地・森林複合生態系に位置するガマディ「むら」では、必需食糧の5割が野生動物に求められている。その狩猟には散弾銃やトラックが使用され、従前に比較して狩猟効率が著しくたかめられている。このような状況は、ジナン族のみならず、中部アーネムランドの各部族に共通する。アーネムランド・アボリジニは、文明の利器を選択的に受容した「現代の狩猟民」である。

こうしたアボリジニの狩猟は、狩猟動物の種類に応じ、従来とは違った戦略の一のもとできわめて計画的におこなわれている。この特色は、散弾銃の受容以前とは狩猟具・方法がともにおおきく変容したからこそ認められる。このような変化、つまり従来とは異なるあらたな戦略の採用は、彼らが「現代の狩猟民」に変容することによってもたらされたのであろう。乾季のおわりごろのカササギガン猟にみられる一種の三角測量は、あらたに採用された戦略の典型例である。

短時日の間にこうした急速な変容をとげる一方で、彼らは伝統的な生活習慣の少なくとも一部を保持しつつけている。それを端的に示すのが、精霊によびかける魚のよびせ行動であり、メイン・トーテム（ドリミング）にかかわる食物規制と、その結果としての狩猟規制である。しかし、その規制は一時的であり、基本的には死者との間の限られた血縁者にしか効力をもたないことは、注意される。これが、ジャッキー・ウヌウンをリーダーとするガマディ「むら」の成員すべてにおよぶことになるとすれば、食糧資源の開発がきわめて困難になるだろうからである。

ガマディ「むら」の狩猟をめぐる議論で明らかになったこれらの事実は、1970年代以降にあらたに建設された「むら」つまりアウトステーションは、生活全般にわたって変容をせまられるなかで、伝統文化を保持する拠点として機能していることを示すのである。

謝 辞

この報告は、1982・84・86年度にわたる文部省科学研究費補助金による海外学術調査研究、「オーストラリア原住民社会の計量人類学的研究」(82年度)、「オーストラリア原住民社会の社会再編

成」(84年度), 「オーストラリア・アボリジニ社会の経済変容」(86年度, いずれも代表者は国立民族学博物館 小山修三助教授)の成果の一部である。報告の作成にあたり, 小山修三助教授が組織する民博の共同研究「オーストラリア社会の研究」では, いくつかのトピックスについて討論と助言をいただいた。小山氏をはじめとする共同研究メンバーの方がたにお礼申しあげる。

文 献

- ALTMAN, J. C.
1980 The Aboriginal Economy. In R. Jones (ed.), *Northern Australia: Options and Implications*, Research School of Pacific Studies, Australian National University, pp. 87-107.
1982 Maningrida Outstations: A Preliminary Economic Overview. In E. A. Young and E. K. Fisk (ed.), *The Aboriginal Component in the Australian Economy: Small Rural Communities*, Development Studies Centre, Australian National University, pp. 1-42.
- BERNDT, R. M.
1959 The Concept of 'The Tribe' in the Western Desert of Australia. *Oceania* 30(2): 81-107.
- BERNDT, R. M. and C. H. BERNDT
1985(1964) *The World of the First Australians: Aboriginal Traditional Life: Past and Present*. Adelaide: Rigby Publishers.
1970 *Man, Land and Myth in Northern Australia: The Gunwinggu People*. Michigan State University Press.
- BINFORD, R. L.
1980 Willow Smoke and Dogs'tails: Hunter-Gatherer Settlement System and Archeological Site Formation. *American Antiquity* 45(1): 4-20.
- BIRDSELL, J. B.
1953 Some Environmental and Cultural Factors Influencing the Structuring of Australian Aboriginal Populations. *American Naturalist* 87: 171-207.
- BORSBOOM, A. P.
1978 *Maradjiri: A Modern Ritual Complex in Arnhem Land, North Australia*. Nijmegen: Centrale Reprografie Directoraat A-Faculteiten Katholieke Universiteit.
- ELKIN, A. P.
1981(1938) *The Australian Aborigines*. London, Sydney: Angus & Robertson Publishers.
- FISK, E. K.
1985 *The Aboriginal Economy in Town and Country*. Sydney: George Allen & Unwin.
- HALLAM, S. J.
1979 *Fire and Hearth: A Study of Aboriginal Usage and European Usurpation in South-western Australia*. Australian Institute of Aboriginal Studies.
- JONES, R.
1969 Fire-stick Farming. *Australian Natural History* 16: 224-228.
1980 Hunters in the Australian Coastal Savanna. In D. R. Harris (ed.), *Human Ecology in Savanna Environments*, London: Academic Press, pp. 107-146.
- KIRK, R. L.
1981 *Aboriginal Man Adapting: The Human Biology of Australian Aborigines*. Oxford University Press.
- 小山修三
1985 「アボリジニの英単語」『季刊民族学』 33: 6-19。
1986 「ブーメランをもった狩猟民」『アニマ』 157: 73-75。
- LATZ, P. K. and G. F. GRIFFIN
1979 Changes in Aboriginal Land and Management in Relation to Fire and to Food

- Plants in Central Australia. In B. S. Hetzel and H. J. Frith (eds.), *The Nutrition of Aborigines in Relation to the Ecosystem of Central Australia*, Melbourne: Commonwealth Scientific and Industrial Research Organization (CSIRO), pp. 77-85.
- LEVITT, D.
 1981 *Plants and People: Aboriginal Uses of Plants on Groote Eylandt*. Australian Institute of Aboriginal Studies.
- マドック, K.
 1986 『オーストラリアの原住民——社会人類学的素描』松本博之訳 勁草書房。
- 松山利夫
 1986 「狩人の描く動物, アボリジニの木皮画に見る動物観」『アニメ』 157: 84-88。
- MEEHAN, B.
 1977 Man does not Live by Calories: The Role of Shellfish in a Coastal Cuisine. In J. Allen, J. Golson and R. Jones (eds.), *Sunda and Sahul: Prehistoric Studies in Southeast Asia, Melanesia and Australia*, London: Academic Press, pp. 493-531.
 1982 *Shell Bed to Shell Midden*. Australian Institute of Aboriginal Studies.
- MEEHAN, B. and R. JONES
 1980 The Outstation Movement and Hints of a White Backlash. In R. Jones (ed.), *Northern Australia: Options and Implications*, Research School of Pacific Studies, Australian National University, pp. 131-157.
- MILLIKEN, E. P.
 1976 Aboriginal Language Distribution in the Northern Territory. In N. Peterson (ed.), *Tribes and Boundaries in Australia*, Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 239-242.
- PETERSON, N.
 1974 The Importance of Women in Determining the Composition of Residential Groups in Aboriginal Australia. In F. Gale (ed.), *Women's Role in Aboriginal Society* (Second Edition), Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 16-27.
- TINDALE, N. B.
 1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits and Proper Names*. University of California Press.
- WARNER, W. L.
 1964(1937) *A Black Civilization: A Social Study of an Australian Tribe* (Harper Torchbook Edition). New York: Harper & Row Publishers.
- WYCLIFFE BIBLE TRANSLATORS
 1986 *Abrayam Djinang*. Summer Institute of Linguistics, Australian Aboriginal Branch.